



## 祭祀について

石製模造品の鏡・剣・勾玉などを用いて祭祀を行う方法は4世紀後半から5世紀初め頃に大和国から始まったものです。

大和政権の大王（後の天皇）は各地に軍隊を派遣し、地方の豪族を支配下に置きました。

その際、豪族たちは大王と同じ墓（前方後円墳）を造ることを許され、さらに大王から下賜された三角縁神獣鏡を墓に入れ、大王と同じ葬送儀礼を行いました。

これと同じように、石製模造品を用いて神を祀る大和型の祭祀を全国に広め、“神まつり”のありかたも統一しようとしたものと思われます。

このことは古墳時代後期の祭祀からも裏付けられます。6世紀になると石製模造品は使われなくなり、土製模造品にとって替わります。それも全国一斉に替わります。これは紛れもなく、大和政権による祭祀の統一です。

わきょう まつくいそうかくきょう  
**和鏡 松喰双鶴鏡**

日詰遺跡の墓とみられる穴の中から発見された青銅製の鏡で、面径は11.4cmあります。鏡の裏面に松の小枝をくわえて飛んでいる2羽の鶴が刻まれています。松喰鶴文(まつくいづるもん、または、まつばみづるもん)はそこから名前がつけられた文様です。青銅の鏡は、弥生時代から奈良時代までは大陸からの輸入品か、それをまねて日本で作ったものでした。平安時代になって日本独特の文様をつけた鏡が作られるようになりました。このような鏡を和鏡といいます。松喰鶴文鏡はその代表的なもので、平安時代後期以降に作られるようになります。この資料は、中世のものと思われます。



せいとうきょう      そもんきょう  
青銅鏡 素文鏡

日詰遺跡で発見された鏡で、どのように出土したかは不明です。面径は5.7cmです。鏡の裏面に文様がないことから名づけられています。仿製鏡(ぼうせいきょう)とよばれる大陸から輸入された鏡を日本で模倣して作った鏡です。このような小型の青銅鏡は、一般的に祭祀関係の遺跡や遺構から出土することが多く、日詰遺跡の鏡もそのような性格をもったものと思われます。古墳時代中期から後期(5世紀から7世紀)のものと考えられます。



せいとうきょう      へんけいしじゅうきょう  
青銅鏡 変形四獣鏡

仿製鏡で面径6.7cmあります。四獣鏡は鈕（ちゆう 裏面の突出した部分をいい、ひもを通す孔がある）のまわりに4つの獣が配置されていますが、本来のものより変形しているようです。また文様が鮮明ではなく、分かりにくい状態です。予備調査の際出土したのですが、その後の調査で祭祀遺構（B-IV祭祀）にあったもので、まつりに使用された鏡であったことが分かりました。古墳時代中期（5世紀）のものと考えられます。



じかん  
耳環

耳飾り。現代でいえばイヤリングです。一部に金が残っていますので、全体が金めっきされていたものと思われます。このように金が施されたものを金環(きんかん)と呼びます。古墳から出土する人物埴輪にも表現されており、貴人階層から農民階層まで身に着けた古墳時代の一般的な装身具でした。この資料は古墳時代中期から後期(5世紀から7世紀)のものと考えられます。





どうくしろ  
銅釧

青銅製の腕輪。手首に着けていた装身具です。青銅の薄い帯状の板を輪に曲げただけの単純なデザインになっています。一般の人が身につけたアクセサリだったようです。日詰遺跡で発見された銅釧は、弥生時代後期のものと考えられます。

